

博士学位論文審査要旨

2017年7月9日

論文題目：中日近代文学における留学生表象

——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——

学位申請者：林 麗 婷

審査委員

主 査：文学研究科 教授 田中 勳 儀

副 査：文学研究科 教授 西川 貴 子

副 査：文学部 准教授 瀬崎 圭 二

要 旨：

本論文は、20世紀前半期の中国人日本留学生を中心に、中国と日本の近代文学における留学生の表象を分析した論考である。日清戦争後の1896年以来、半世紀にわたって継続的に中国から留学生が来日した。満州事変や日中戦争など、両国間は常に緊張をはらんでいたが、その間にさまざまな留学生小説が生み出された。

第一部では、中国で著された小説を採り上げ、日中の社会状況と絡めながら、年代順に留学生の表象を分析する。1908年刊行の南武野蛮『新石頭記』は、『石頭記(紅樓夢)』の主人公が近代日本にタイムスリップする奇抜な内容で、同時代に出版された“留学生案内”と通底する。大中華意識を保ちつつ近代国民国家への憧れを綴った、清末知識人の日本へのまなざしが窺われる作品と位置づけた。1920年代の作家張資平の「一班冗員的生活」は、大正期の留学生のあり方が主題とされている。日本帝国主義の拡張に対して反日運動が高まりを見せる中、留学生と自国の間の矛盾を浮き彫りにし、中華民国内部の問題を剔抉した作品と評価した。1930年代の女子留学生が表象された崔万秋『新路』は、満州事変前後における留学生の葛藤が恋愛問題とともに書き込まれた作品とする。

第二部では、日本人作家が留学問題を扱った小説を採り上げ、日中戦争下の問題を分析する。盧溝橋事件直後、郭沫若が密かに帰国した経緯を描いた佐藤春夫「アジアの子」は、留学経験を持つ中国人を日本文化の移出普及に役立たせようとする、日本の対中政策と軌を一にする作品と位置づけた。太平洋戦争下、“大東亜五大宣言”の小説化として著された太宰治『惜別』は、留学生時代の魯迅を主人公として、明治末の日中親和物語の破綻を描く「独立親和」のパロディーと判断する。上海東亜同文書院への留学経験に基づいて、戦後、大城立裕が著した『朝、上海に立ちつくす』は、沖縄問題を絡めつつ“同文同種”“日中共栄”の理念と現実の矛盾を掘り下げた作品と評価した。

各章相互の論理的な関係に一抹の不安が残るが、日中両国の近代文学の諸問題を大きな視野で扱った意欲的な論文として評価できる。よって、本論文は、博士(国文学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2017年7月9日

論文題目：中日近代文学における留学生表象
——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——

学位申請者：林 麗 婷

審査委員

主 査：文学研究科 教授 田中 励 儀

副 査：文学研究科 教授 西川 貴 子

副 査：文学部 准教授 瀬崎 圭 二

要 旨：

上記審査委員3名は、2017年7月8日、午後5時30分から約2時間にわたり、徳照館第1共同利用室において、公開で学位申請者に対して、口頭試問を行なった。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、外国語（英語）についても、十分な学力のあることが確認された。

よって、本論文に関する総合試験の結果は合格であると認められる。

博士學位論文要旨

論文題目：中日近代文学における留学生表象

——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——

氏名：林 麗婷

要旨：

本論文は、二〇世紀前半期の中国人日本留学生を中心に、中日近代文学における留学生表象を明らかにしたものである。日清戦争後、中国人の日本留学が始まった。それに伴い、文学において留学生がしばしば登場する。先行研究では、二〇世紀の中日関係を踏まえ、留学生をナショナリズムと絡んで論じられることが多い。しかし、本論文で明らかにするように、留学生小説では、国民意識が芽生えつつも従来の大中華意識を温存する留学生もいれば、愛国と享楽の間に揺れる留学生もいる。また、留学生の間の葛藤や留学生と自国との齟齬を描く小説もある。さらに書き手の問題であるが、先行研究では、主に中国人作家の作品を取り上げたが、既述のように、日本人作家の手による留学生表象もある。中国にとっての他者が留学生をどのように描き出すかは実に興味深い問題である。

以上を踏まえ、本研究はナショナリズムの問題を念頭におきつつ、「愛国」の裏にさまざまな問題を抱える留学生の表象について論じる。書き手の留学経験を問わず、留学生が表象される作品を対象にする。具体的には、二部の構成で、六篇の小説を扱う。

第一部では、三人の中国人作家による中国語小説を扱う。第一章では、南武野蛮『新石頭記』を中心に、清末の日本留学はいかに表象されたかを検討する。日清戦争以降、留学生の洋行に伴い、文学者は小説のなかに留学生を描き出すことによって、理想を語ったり、社会の暗黒面を暴露・批判したりした。しかし、中国人はなぜ留学したのか、その経緯を描いたものは多くない。

『新石頭記』はそれを考察するによい作品である。古典小説『石頭記』の主人公賈宝玉が近代にタイムスリップし、さらに日本へ留学するという一見して奇抜な小説であるが、作品を細かく読み解くと、宝玉の渡日のルートや経過は同時代の留学生案内と相通じるところが多く、読者にリアリティを感じさせ、清末の日本留学ブームと緊密に関わっていることが見えてくる。宝玉は前近代から近代に来て、「文明」日本を体験した。彼の日本へのまなざしは近代国民国家への想像に基づいたものであり、日本を受け入れたのも、西洋近代「文明」を受容したことによる。宝玉の経験は清末知識人の日本体験を物語るものである。ただ、作品に現れる大中華意識も見逃せない。

第二章では、一九二〇年代の文学団体、創造社の主要な書き手の一人である張資平の作品に注目する。特に「一班冗員的生活」を中心に、大正期の留学生のありかたを考察する。大正期の中日関係の特徴は、日本帝国主義の拡張による「対華二十一ヶ条要求」（一九一五）や「日支共同防敵軍事協定」（一九一八）などに対して、中国人の反日運動が高まりつつあったことにある。先行研究にもあるように、この時期の留学生表象といえば、人々に強い印象を残しているのは、郁達夫の「沈淪」（『沈淪』所収、一九二一・一〇、上海泰東図書局）に描かれるように、弱小国の出身者として日本で差別を受け、「祖国よ、強くなってくれ」と叫ぶ愛国青年の姿である。張資平の作品にもナショナリズムの要素がないわけではない。しかし、「一班冗員的生活」では、ナショナリズムの問題というより、留学生の貧困がクローズアップされており、留学生の間や、留学生と自国の間の矛盾を浮き彫りにし、中華民国内部の問題にメスを入れたといえよう。大正

時代の留学生が置かれた状況をより鮮明に描き出す本作は、「愛国青年」というステレオタイプの留学生像とは異なるイメージを提供する作品として評価できるのである。

第三章では、崔万秋『新路』を対象に、一九三〇年代の女子留学生の表象を検討する。先行研究では、朱美禄が『新路』における留学生の救国と啓蒙の問題を論じたが、作品では留学生、特に女子留学生の資本主義文明を享受している様子、恋愛問題がふんだんに書き込まれている。中国人女子留学生は男子留学生よりやや遅れたものの、一八九九年から少しずつ東京に姿を現した。それに伴い、文学作品にも女子留学生が時々登場するが、『留東外史』や陶晶孫の小説にあるように、多くの場合女子留学生は単なる端役に過ぎなかった。『新路』に至って、女子留学生が真正面から描かれ始めたのである。本作は一九三一年満洲事変の前後における留学生の日常生活や感情の葛藤が描かれている。とりわけ三人の女子留学生の外見や住まい、活動などについての描写から、「摩登哥兒」^{モダンガール}としての女子留学生が浮き彫りになった。女子留学生たちは日本で資本主義の消費文明に思う存分浸っており、上海のモダンガールを彷彿とさせながら、日本を見返す存在ともなった。

第二部では、日本人作家の手による留学生像を検討する。盧溝橋事件の後、中国文学における留学生小説が少なくなる。一方、日本文学において、留学生が登場するものは増える。第四章では、佐藤春夫「アジアの子」を考察する。本作は盧溝橋事件勃発直後、中国知識人郭沫若がひそかに日本を脱出した経緯を描いた「シナリオ小説」である。従来の研究では、佐藤春夫と郁達夫の関係、佐藤の日本主義などの面から従来多くの批判を受けているが、本章では、郭沫若の日本脱出に対する日本知識人の反応を確認したうえで、盧溝橋事件によるかつての中国人留学生の帰国がどのように理解された／されようとしたのかを明らかにしたい。そして留学生の日本での活動を踏まえ、作品分析を通して佐藤が中国知識人／留学生に対する想像力について検討する。

第五章では、太宰治『惜別』を考察の対象とする。『惜別』は「大東亜共同宣言」の中の「独立親和」原則を小説化する国策小説である。太平洋戦争期以降における日本の留学生政策と大東亜共栄圏との関係を踏まえて、本作の批評性を論じたい。太平洋戦争期以降、大日本帝国は留学生を大東亜共栄圏建設の柱に位置づけようとし、留学生と日本人との「親和」物語を求める。しかし、『惜別』に描かれているのは日本人とだんだん疎遠になり、最終的に「忠の一元論」を捨てて中国自らの論理を信じるようになり、日本を去ってゆく周さんのありようである。太宰は明治末の親和物語の破綻を描いて、戦時下の「独立親和」のパロディーを作ったのである。

第六章では、大城立裕『朝、上海に立ちつくす』を扱う。これまで検討してきた作品と異なり、本作は沖縄出身の青年知名の太平洋戦争期、上海東亜同文書院での留学経験を綴る物語である。知名は「大陸雄飛」の夢を抱えて上海に渡ったが、軍米収買や勤労働員などの経験を通じて、書院に不信感を感じるようになり、自分の居場所に懐疑を抱くようになる。本章では、作品の社会的背景を確認したうえで、作品に描かれている書院生が信仰する「同文同種」、「日中共栄」の理念と現実との矛盾を分析し、同文書院の破綻および知名のアイデンティティーにもたらす影響を考察する。